

謎の「与那覇ばら軍 (いうさ)」について

下地 和宏 (宮古島市総合博物館協議会)

はじめに

突如として「与那覇ばら」と呼ばれた謎の「戦闘集団」が、宮古に現れた。この集団は各地を攻略し人民を恐怖に陥れたが、最後は目黒盛の軍勢に敗れ去ったという。「宮古島記事仕次」(1748年、以下「記事仕次」と略す)にその様子が記述されており、「与那覇ばら軍 (いうさ)」と呼ばれている。

「記事仕次」では、与那覇ばら軍は二通りの意味で使われている。軍 (いうさ) と集団としての軍である。本稿では軍 (いうさ) の場合は「与那覇ばら軍」、集団を意味する場合は与那覇ばら軍として記述する。

さて「与那覇ばら軍」の時代とはいつ頃のことなのか。また、この伝承の軍 (いうさ) は郷土史にどのように位置づけられているのか。極めて重要な課題である。この軍の時代は目黒盛という人物がいつ頃の人であるかという課題とおおいに関係している。与那覇ばら軍に滅ぼされたという村々の発掘した考古資料もその目安となる。

島尻勝太郎は次のように提起している。

「島内には多くの城といわれる遺跡があり、これにまつわる豪族の争いが旧記に物語られている。これをすべて史実とみることは出来ないであろうが、多くの小部落が、次第に勢力のある者に統合支配され、政治社会が成立していく過程を、これによって考えていくことが出来ないものであろうか。和〔倭〕人又は沖縄本島からの有力者の来島についてももっと考えてみるべきであろう。与那覇原軍の活動は、宮古史の

中で大きな謎であり、目黒盛との対立についても、又与那覇勢頭と仲宗根豊見親との関係も不明な点が多く、又両人の中山朝貢についても家譜では理想化されているように見える。宮古の政治、社会、経済の発展段階から検討してみることが必要であろう。」(注1)

近年、遺跡や遺物から「与那覇原軍」を解明しようとする共同研究が進められ、『伝説の争乱・与那覇原軍～宮古島の13世紀から15世紀にかけての防御的遺跡の消長に関する研究～』(2018年)として報告されている。この試みは宮古島の①石積遺構、②中国産陶磁器、③出土銭貨の3つの視点からアプローチしている。極めて意欲に満ちた報告書で、現在の研究水準が示されている。

宮古の二代名著は、目黒盛と与那覇ばら軍との決戦を14世紀半ば頃のことだと説いている。慶世村恒任は『宮古史伝』(1927年、以下「史伝」と略す)で、1365年、目黒盛25歳の時だと述べている。一方、稲村賢敷は『宮古島庶民史』(1957年、以下「庶民史」と略す)で、1370年代、年齢については50歳前後としている。また、砂川明芳は『宮古島郷土史考』第3部(1984年、以下「郷土史考」と略す)で、稲村の世代計算(1世代26年)に疑問をもち、「二八」を1世代として、1408年頃、目黒盛18歳の頃だと提起している。

三者の推定については後述するが、「与那覇ばら軍」と呼ばれる争乱を目黒盛が治めたのは14世紀の半ばなのか、あるいは15世紀の初頭なのか、改めて向き合い整合性があるのかどうか見ていく事にする。この場合、史実かどうかの間

題は端において、あくまでも伝承という枠組みの中での考察となる。

「史伝」および「庶民史」に述べられた先達の考察の検証を通して、発掘調査の考古資料も重ね合わせ「与那覇ばら軍」の時期およびその実態を考察することが本稿のねらいである。

1、「与那覇ばら」は何処にあったか

「与那覇ばら」と呼ばれる村は何処にあったのか、という問いに対して今のところ明確な答えは持ち合わせていないが、遺跡というカテゴリーでは確認されていない。

与那覇ばらの領地について「記事仕次」は「平良より東に与那覇ばらとて一間切あり」(注2)と記しているだけである。ここでいう「東」とは民俗方位のことであり、ほぼ南東にあたる。その他に平良からの方位を示している地域に西銘村がある。「西銘は平良より三里程東方にありし一間切也」(注3)と記し、平良からの距離を具体的に示している。これは大きな違いである。この二つの間切は平良から東に位置している。ところが、平良からの距離に遠近があるような表現にも読み取れる。すなわち、与那覇ばらという間切は平良の近くにあり、西銘間切は平良から遠いところにある、というように。

「史伝」は「仲宗根の東方程近い所に(東川根の附近一帯の地という)与那覇原という村」(注4)があるという。一方「庶民史」は「与那覇原の旧跡は平良の東方東川根の附近であって、盛加井を中心として東を川根原といい、西を与那覇原と称した。」(注5)と具体性をもたせている。両著ともに与那覇ばらと呼ばれる村あるいは旧跡は「東川根附近一帯」にあったということでは一致している。

「庶民史」は更に続けてその範囲を詳説している。与那覇原には佐多大人の居館があった。

その南は大籠^{うぶぐわり}、その南は南里^{ばいだて}(今の羽立^{ぼだて})、その南は出口^{いでふつ}と称して、当時この附近まで部落があった。更に、その南は前比屋^{まえびや}、大原と称し当時原屋のあった所で、越原^{こしはる}や七次嶽等にも畑地が広がっていた、と述べている。「これらは総て与那覇原を中心とした地名であるから、その勢力下にあったと考えられる。」(注6)と述べ、与那覇ばらの領地は南に広がっていたことを説明している。

新版「庶民史」(1972)では、平良市東方にある「テラフグ御嶽」附近を調査した結果、ここが与那覇原軍の本拠であったことを確認したと述べている。ここは「東川根」または「川根原」から200メートルしか離れていない。その上、この附近から青磁類の破片が拾得されたことで、当時東支那海を寇掠した倭寇の一味に間違いのない、と強調している。(注7)

ここで問題になるのは、佐多大人を首領とする「与那覇ばら」と呼ばれる間切を「東川根附近一帯」と特定していいのだろうかということである。ここから目黒盛の根間・外間の城あたりまでわずかに1キロばかり離れているにすぎない。また、「与那覇ばら」の人々は、どこから来てどのくらいの期間、宮古に存在したのだろうかということである。それから「与那覇ばら」を倭寇の一味であると特定していいのだろうかということである。

倭寇についていえば、稲村は童名が一らは倭寇の子孫だという。目黒盛の父根間角が一ら天太の大氏は、与那覇勢頭豊見親が中山朝貢した1390年から5、60年遡った頃(1330~1340年)に生まれたと考えられるので、「宮古における童名が一らの使用された最も古い年代である。」(注8)と述べている。

この考えにたてば、目黒盛は倭寇の子孫となり、倭寇の一味である「与那覇ばら」と優劣を

争ったことになる。いわば「与那覇ばら軍」とは、倭寇による島の覇権争いであったと見ることもできる。つまり根間角が一ら天太の大氏および父根間の大按司も倭寇ということになる。

ただし倭寇とは稲村のいう「前期倭寇」(1350～1392)であり、想定年代とはずれることになる。

ちなみに、稲村が提起する1世代26年からすれば、目黒盛の父根間角が一ら天太の大氏は1353年頃に生まれたことになる。

2、「与那覇ばら」という集団

宮古に突如として現れた「与那覇ばら」について、「記事仕次」は「一、目黒盛豊見親、与那覇ばらと軍の事」(注9)という項目を設け、以下のように述べている。

其の頃は兵を好んで戦伐止むことなし。若戦い負る時は其の村を焼き払へ男女一人も不殺屠殺し、其の田畑を奪取る世俗なり。爰に平良より東に与那覇ばらとて一間切あり。其の主は作多お不ひとと云う者なり。此の郡に兵十行あり。一津らとは百人をいう。この十つらの兵共驍勇にして至極無道なり。常に諸村を攻落すを業として厭う事なし。昔は西の百郡、東の百郡とて村々お不かりしを与那覇ばらの兵共に過半不ろぼされたり。

「与那覇ばら」と呼ばれる間切は「平良の東」にあり、千人の兵どもは「至極無道」な集団である。その首領を「作多お不ひと(佐多大人)」という。当時は「西の百郡、東の百郡」といわれるくらい村々は多かったが、そのほとんどは与那覇ばら軍に滅ぼされた。この戦闘集団を「史伝」も「庶民史」も「与那覇原軍」と表記している。

それでは、突如として現れた与那覇ばらと呼ばれる集団は、いつ頃から村々を攻略すること

になったのだろうか。つまり、いつ頃、どこから宮古に現れたのかである。

「史伝」は、与那覇原は1355年頃から大いに勢力を伸ばし、頭角を現したという。その頃、西仲宗根一帯を治めていた糸数大按司は1358年頃、小真良波按司に討たれて滅んだという。目黒盛軍に敗れた年代を皇紀2025(1365)年としているので、各領地を攻略した期間はおおよそ10年ぐらを考えているのであろう。(注10)

糸数大按司は、保里嶺に居を構えた保里按司の孫にあたり、新たに糸数城を築いたとされる。父は保久利屋盛、叔父は居士佐加利という。叔父の一子を飛鳥翁とびとりやといい、従兄弟にあたる。飛鳥翁は西銘城・西銘按司の於母婦おもはの婿となり、その領地を拡大したが、石原城・思千代按司の謀略にあい滅亡した。従兄弟の糸数大按司は、豊年祭に思千代按司父子を招き謀殺、飛鳥翁の仇を討ったという。琉球津堅島から宮古に移住した小真良波按司兄妹は白川浜に居住していたが、妹は思千代按司に嫁し、兄小真良波按司は狩俣村に居を移したという。糸数大按司は、妹に仇討ちを頼まれた小真良波按司によって討たれたことになっている(図1)。

その10年の間に与那覇原軍は以下の領地を攻略したという(図2)。

まず北に進出して大浦多志城(城主大浦多志豊見親)、ついで東に転じて大嵩城(城主大嵩按司)を攻略した。次に野崎を攻めたが、その主長居士那大氏こぜな おほちの知謀にあい侵入することができなかった。転じてその東方の西美野・美野・美野娥麻等いりみやの みやの みやのがまの村を虐殺した。さらに東に進んで川満原・浦の島を虐殺した。南東方にある高腰城(城主高腰按司)は要害な所にある城でなかなか攻め入ることはできなかった。それで高腰按司の股肱といわれる城原喜屋泊ぐすくばらきやとまりむら村(「記事仕次」には城はら中喜屋泊村とある)を巧みに誘い込み、高腰城を攻め滅ぼした。後に内立按司も亡ぼさ

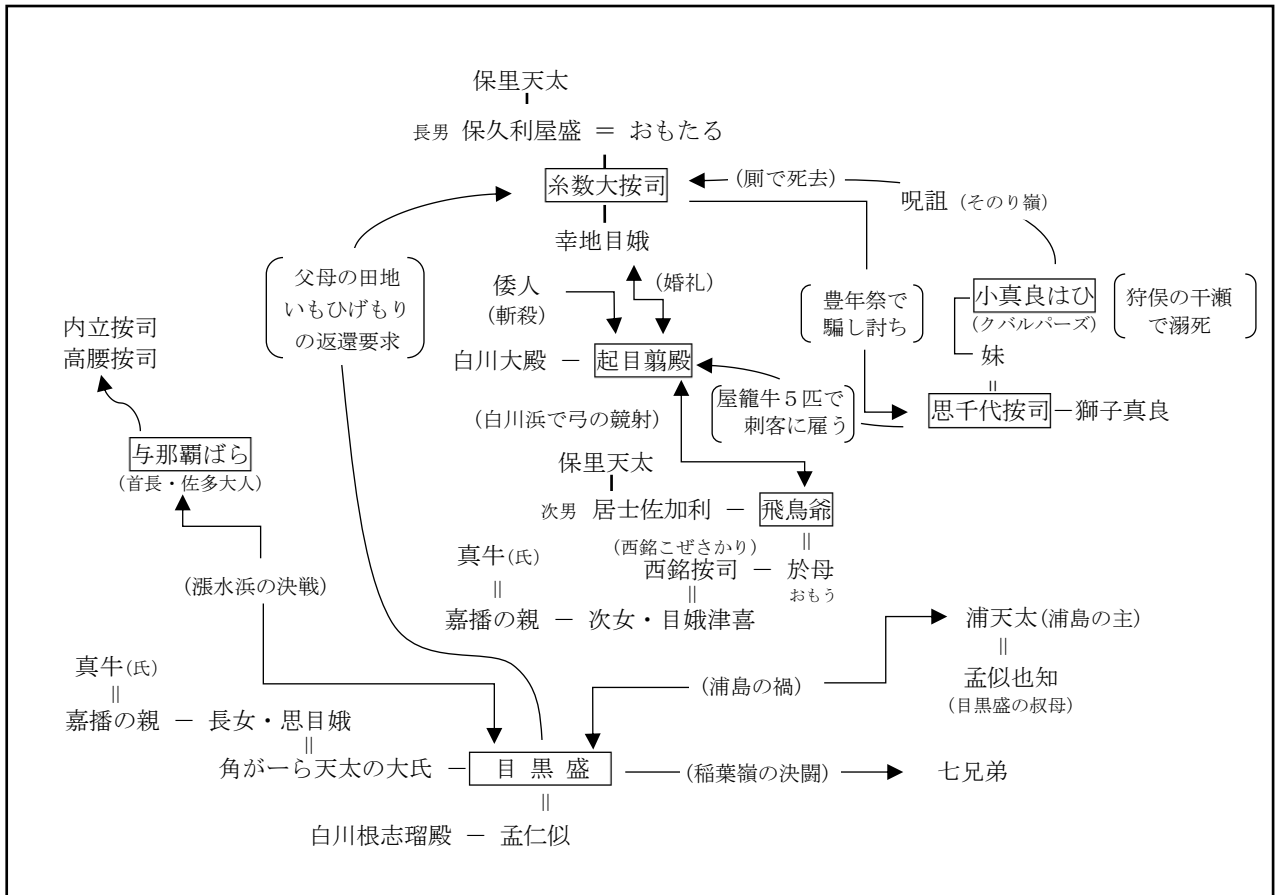


図1、諸按司の相関図（「宮古島記事仕次」より）

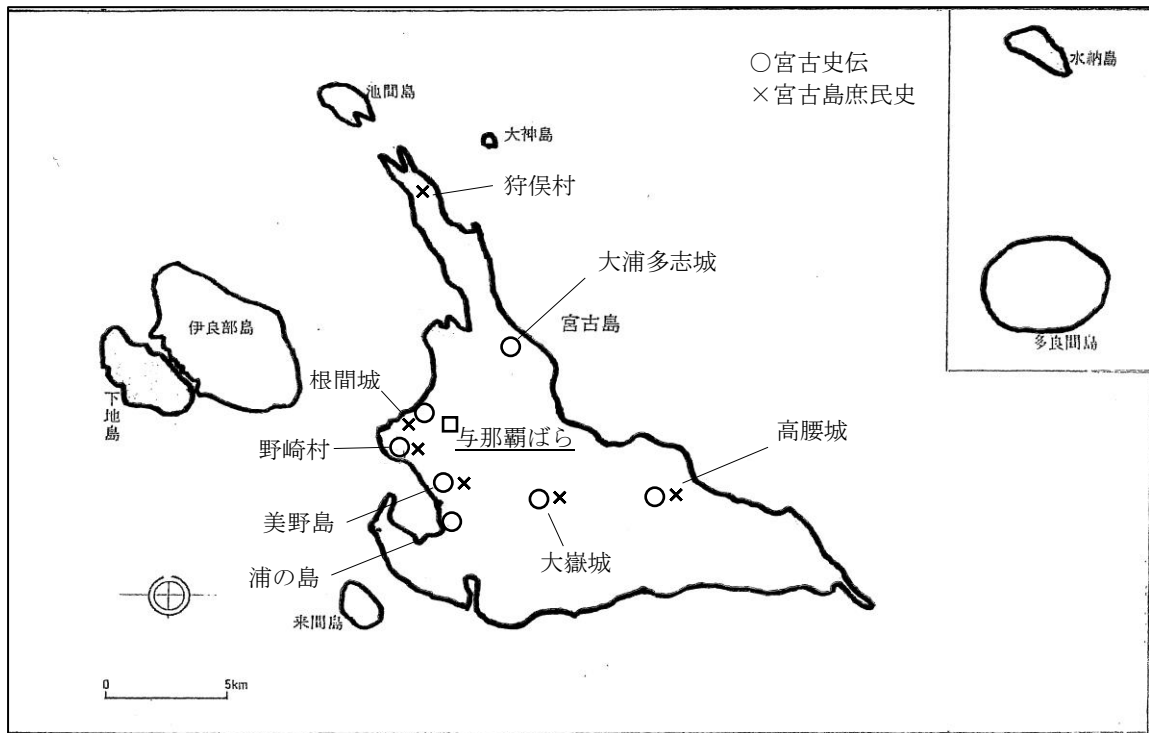


図2 与那覇ばら軍が襲撃した村々

れた。

ちなみに「史伝」は狩俣村襲撃については触れていない。

「庶民史」は、糸数大按司が討たれてその勢力が衰えた頃、平良の東部に与那覇原と称する強大なる一族があったとしている。そして「与那覇原軍の首領佐太大人は、その一族を率いて、当時宮古の各地に割拠していた諸按司の城地を攻撃したので、ここに与那覇原戦争という恐怖代を現出した。」(注11)と述べている(図2)。

与那覇原軍は最初、野崎村を攻めることにしたが、久知名按司の知謀で回避せざるをえなかった。その東方、東美野と西美野に分かれていた美野島^{みのしま}を攻め部落を全滅させた。次に大嶽島の大嶽城(城主大嶽按司)を攻め亡ぼした。喜屋慶村の内立按司は同盟に反して与那覇原軍に与したので、高腰城(城主高腰按司)も落城した。その後、内立按司も与那覇原に滅ぼされた。その他狩俣村にも侵攻したというが、撃退されたようだ。

ちなみに大浦多志城および川満原・浦の島を攻めたことについては「庶民史」は触れていない。

狩俣村については、狩俣村で謡われる祖神の「ニーリ(三)」(注12)を基に考察している。

祖神のニーリ(三)

……

16、シむジあか シがまあか まばから

下地の奴達 洲鎌の奴達が 来たので

17、ピさらうや ピさらとうぬ とうぬや

平良親 平良殿 殿は

18、かうていがら いじていがら くくる

買ってからは 貰ってからは 心だよ(心を許したよ)

19、かうかにかが いじかにかが まばから

(しかし) 買うとも 貰うとも (いわないで)

来たので

20、ピさらうや ピさらとうぬ とうぬや

平良親 平良殿 殿は

21、むぬジやま むぬシやま やりば

物恨みをする奴 物猜みをする奴 だから

22、ぬぬ とうらでい たま とうらでい キ

たんむ

布を取ろうとて 玉を取ろうとて 来たのであろう

23、まやぬまーぶ とうゆんまーぶ くジざ

真屋のマブコイは 鳴響むマブコイは

24、ならぐとうん さシぐとうん あらだ

自分の事でも 差しごと(命令)でも ないのに

25、ならぶばが うやぶばが チみやーん

自分の叔母の 親叔母の ために

26、やらばジでい やらとうんでい みーり

ば

家から走りだして 家からとびだして みると

27、んなばシぬ ぱるばシぬ うざむや

空の果ての 原の果ての 労役夫達(を駆り集めて)

……

30、まやぬまーぶ とうゆんまーぶ くジざ

真屋のマブコイは 鳴響むマブコイは

31、ややピとうキ さとうむとうん ぴやり

みやい

家まで一息に 里元に 走り帰って

32、ならかたな さシみジら とうりさし

自分の刀差し 御解ら(刀の名)を 取り差し

33、うぶぐふん さとうんなか ぴやりみや

い

大城に 里(部落)のまん中に 走り参って

34、ならかたな さシみジら ぬーぎやぎ

自分の刀差し 御解ら(刀の名)を 抜き上げて

35、たうきやくーる ぴとういくーる くる
ばし

一人の兵を 一人の兵を 倒して

36、まやぬまーぶ とうゆんまーぶ クジギ
真屋のマブコイは 鳴響むマブコイは

37、みやくとうなぎ シまとうなぎ とうゆ
たり

宮古が永久にある限り 島がある限り 響んだ
(のである)

このニーリ(三)は下地、洲鎌等の所領地の者を狩り集めて、村々を攻略した与那覇原軍の狩侯襲撃のことを歌ったものである、という。狩侯の女曾まーづまらの時代は、与那覇原の首領与那覇勢頭豊見親の中山朝貢の1390年から2、30年前として1360~70年頃であろう、と述べている(注13)。そのころ狩侯を襲撃した与那覇原軍は女曾まーづまらの甥まやぬまーぶの武力によって撃退された、ということであろう。その後、1370年代に与那覇原軍は目黒盛に戦をしかけ敗北したことになる。

3、「与那覇ばら軍」の年代

「記事仕次」には「与那覇ばら軍」より以前にあったとされる諸按司の争いがつづられている。(図1)

この頃の武器といえば弓矢が代表である。弓矢や刀剣が「記事仕次」に見える。高腰城では鉄製の鏃が1点、根間城(住屋遺跡)では鎧の小札が1点出土しているにすぎない。

武器のうち特に弓については、昔は八重山島からおもと竹を取り寄せ弓は作っていたという。城内では細かい14の目を開けた「竹の組み的」を作り、矢七手で弓取りの優劣を競っていたようだ。勝者は「無双の弓取」として評される。彼らは「武道の達人」といわれる。また矢の先

を割って石を込めて両眼を射る工夫までされている。

東仲宗根白川場の起目翦殿は弓の争いで「狩侯」の矢で、飛鳥爺の両眼を射抜いたとされる。この雁股の矢は大和から伝来した重藤の弓と考えられている(注14)。あるいは起目翦殿が倭人だったのかもしれない。糸数城で起目翦殿の縁組み儀礼の最中、起目翦殿の首を剣で切り落としたのも倭人であったという。この倭人や起目翦殿は刺客として按司に雇われた事例であろう。

さて、「与那覇ばら軍」とはいつのことであろうか。郷土史にとっては関心を寄せる事項の1つであろう。この軍(いうさ)のことを「史伝」および「庶民史」は「与那覇原戦争」と表記している。

まず、「史伝」の考えを見ることにしよう。

根拠は不明だが、目黒盛は皇紀2000(1340)年の頃、「島内の争乱が漸く酣にならんとする時、仲宗根の根島(根間)で生まれた。」(注15)としている。目黒盛の父は根間大按司の次男根間角嘉和良天太大氏という。目黒盛が3歳の頃、父母は他界したので、叔父根間の大氏に養育されたという。目黒盛は12、3歳の頃には「武道の達人」として名をはせるようになった。17歳の春、白川根志瑠殿の娘・孟仁似と結ばれ、根間・外間に勢力を張った。真角与那盤殿は「目黒盛が与那覇原を敗[破]った年に生まれたので、ユナパンを名にいったという。パンとは防ぎ返す意である。」(注16)という。

与那覇原が台頭したのは1355年頃だとしているので、滅亡までのおよそ10年間は与那覇原戦争の時代であったと考えられる。

一方、「庶民史」も糸数按司が亡くなった後に与那覇原軍が台頭したと見ている。糸数按司の時代を1355年頃と推定している所以、そう遠くない時期に亡くなったのであろうか。根拠は不確かだが、目黒盛との決戦の年代を「洪武年間

の初頃 (1370 年代) に当り、与那覇勢頭豊見親の中山朝貢より 20 年程前のことである。」と述べている。これからすれば、およそ 10 年余が与那覇原戦争の時期であったと考えられる。

「史伝」も「庶民史」も与那覇原戦争は 10 年あるいは 10 年余に及んだ戦争と見ているのだろう。西仲宗根一帯の首長であった糸数大按司が滅ぼされた後、戦闘集団ともいべき与那覇原軍が頭角を現したという背景は、両著ともに共通した考えである。

「史伝」は、仲宗根では目黒盛がそろそろ勢いを得てきたが未だ与那覇原軍の敵ではなかった。それで与那覇原軍は東北部の高腰城攻めに勢力を注いだ、という (注 16)。「庶民史」は、このような戦の時代にあっても、目黒盛の領内だけは割合に平和で、農業に励み武力を休養することができたと述べている。(注 17)

目黒盛の旧跡根間の南は^す住みや、北東は^{しりま}尻間、その北は^{わーさくわり}東小籠、その北は^{たかあら}高阿良と称した。根間と外間の間は^{なかや}中屋、外間の北は^{なみだて}並立、その北は^{しりだて}尻立と称している。これらは根間を中心とした名称であるから目黒盛の勢力下にあったと「庶民史」は述べている。(注 19)

与那覇原の間切東川根一帯と根間・外間を中心とする目黒盛の領地とは距離にしてわずかに 1 キロばかりしかないのに、各地が与那覇原軍に攻略されていたなまぐさい戦の時代、目黒盛を支える人々は、なぜ平和に過ごすことが出来たのだろうか。

「史伝」は島内の大方を手中に治めた「与那覇原軍との間に一大衝突のおこるべきは、日を期して待たるる情勢となった。」(注 20) と説明している。

「庶民史」が目黒盛と与那覇原軍との決戦を 1370 年代と想定したのは、世代計算を基にしたと考えられる。白川氏家譜正統および忠導氏家譜正統の 10 世代を基に 1 世代を 26 年と導き出

している (注 21)。「忠導氏家譜正統」は仲宗根豊見親の生年を天順年間 (1457~1488) と記録しているが、「史伝」も「庶民史」も天順元 (1457) 年の生まれとしている。

仲宗根豊見親は目黒盛の玄孫にあたる。両著の考えを基にすれば、

1457 年 - (26 年 × 3 代) = 1379 年

となり、目黒盛の子真角与那盤殿が生まれた年に当たる。しかし、「庶民史」は「真角与那盤殿は戦争当時まだ幼少であったか、或いは戦後に誕生されたのではなかろうか」「与那盤という名前は与那覇原を破った戦勝の記念として名乗られたものであろう」(注 22) と述べている。戦後に生まれたとすれば、その前年の 1378 年に目黒盛と与那覇原軍との決戦は起きたと考えられる。それで 1370 年代としたのではないだろうか。

ところが、目黒盛は与那覇原軍との決戦当時、すでに 50 歳前後に達していたという。その理由として「青年時代における機略縦横、神出鬼没といったような働きは全くその鋭鋒を隠して、智謀によって最後の勝利を収めようとする、名将としての円熟境に達して居たことを窺うことができる。」(注 23) と述べている。

また、彼の壮年時代は、いわゆる与那覇原軍の恐怖時代であったともいっているので 50 歳前後は壮年と理解しているようである。

この考察によれば、目黒盛は 1420 年代に生まれたことになり、本人が提唱する 1 世代 26 年とする世代計算とは相いれないことになる。また、戦後に生まれたとされる真角与那盤殿は目黒盛の 50 歳前後の子となる。

年代について補足していえば、前述したように、目黒盛の父根間角が一ら天太の大氏が生まれたのは、与那覇勢頭豊見親が中山に朝貢した 1390 年から 5、60 年遡った 1330~1340 年頃と考えられと述べている。この考えを基に、1 世代 26 年を援用すれば、目黒盛は 1356~1366 年

頃に生まれたと考えられる。与那覇原軍と決戦の年は50歳前後と推定されているので、1400年代初期に決戦は引き起こされたことになり、1700年代と矛盾が生ずる。どちらにしてもこの考察の何処かに無理が生じているとしか思えない。

「郷土史考」は「二八」という年齢に着目し1世代を16年として考察している(注24)。目黒盛は七兄弟を打ち破り父祖伝来の領地「いもひげもり」を取り返した。当時はあらたに人を殺すときは「かすは」といって沐浴する習俗があったという。目黒盛は白明井で沐浴している時、孟仁似という美人に出会う。二人の若者は「二八ばかり」の年齢という。二人は出会いの奇縁で結ばれる。義父白川根志瑠殿の援助もあったのであろう。これを機に目黒盛は地盤を固め仲宗根に勢力を広げたようである。

また、忠導氏家譜正統の記事にも着目している。仲宗根豊見親の次男の第一子長女は弘治3(1490)年生まれである。祖父豊見親は1457年生まれとされているから、孫との年齢差は33歳である。つまり17歳の時に生まれたと見られる。兄が年子とすれば、兄は16歳で父になったと見られる。

1世代を16年と想定すれば、

1457年—(16年×3代)=1409年

となり、真角与那盤殿が生まれた年にあたる。その前年1408年が目黒盛と与那覇原軍の決戦であったと考えられる。すなわちこの戦は、与那覇勢頭豊見親の中山朝貢(1390年)後に起きたことになる。

ちなみに「宮古島旧記」(注25)には13~18歳頃に結ばれるケースが散見される。

- ① 砂川の佐阿禰二八ばかりの頃、むまの按司と結ばれる。
- ② 野崎の真牛、17、8歳になったので隣所の男と夫婦となる。

③ 天仁屋大つかさの3女まか那志、13歳の頃懐胎する。

④ すみや里の娘14、5歳の頃懐胎する。

これらの事例は当時の社会を反映していることだと考えられるので、当時の1世代は16年であったらしいことは全然否定できない要素の一つであろう。

4、与那覇ばら軍の滅亡

伝承を基にした創作かどうかは知る由もないが、与那覇ばら軍に追いつめられ敗北寸前の目黒盛の危急を救ったのは行方不明になっていた飼犬である。それで犬が飛び出した洞窟を「犬川」と名付けたという。

与那覇ばら軍が目黒盛の根間城を急襲した様子を「記事仕次」は、大略以下のように描写している(注26)。

ある時、佐多大人は目黒盛を訪ねて、「これまでは無道の軍(いうさ)に罪なき百姓を残骸してきたことは悔しいことである。これからは先非を改めそなたと和睦したい。」と申し出た。目黒盛も一応了承したが、佐多大人の計略を見抜いていた目黒盛は、城郭を堅固にして用心を怠らなかつた。そのり嶺に旗を立てたら急いで駆けつけることを配下に指示した。与那覇ばらは農繁期を見定め根間・外間の城を急襲した。追い詰められた目黒盛は自害におよぼんとしていた。しかし、7年前に行方不明になっていた飼犬が洞窟から現れ、敵を蹴散らしたおかげで形勢が逆転した。そのうち「不ら崎」(ぶり崎)より駆けつけた西仲宗根の楚良古意の加勢もあり、与那覇ばらに勝利することができた。

逃げ延びた与那覇ばらの者共は、ある夜大勢の人が攻め入るような物音がして一夜のうちに暴死したと伝えられる。これは神明が悪を

戒めたか、あるいは虐殺された村々の怨霊のたたりではないかと、人々は奇妙に思った。「庶民史」はこの決戦に触れて、目黒盛の危急に駆け付けたのは、西仲宗根の主楚良古意であったが、彼も戦死したのであろうという。彼は目黒盛の股肱の臣か、あるいは彼の子であろうと考えている。(注27)

敗北した与那覇原軍の一部は夜にまぎれて美野の浜から舟に乗って与那覇へ逃げ、そこで村を建てた(今の与那覇村はこれから始まったという)。また一部は北方の与那覇間[与那浜]へと逃げのびた。(注28)

与那浜に遁走した一族の中に与那覇原の後継者とされる真佐久(のちの与那覇勢頭豊見親で中山に朝貢した)がいて勢力快復に努めたといわれる。

「庶民史」は、元与那覇公民館前の大通りを境にして南を与那覇原、北を川根原と称しているという。佐多御嶽は佐多大人の英霊の眠る所であろうという。また与那覇原御嶽と称するミヤカは、この戦で敗死した勇士を合祀したものであろうかという(注29)。この与那覇には与那覇原に関する伝承が残っていたらしい。

この決戦、いわゆる目黒盛が10年に及ぶ「与那覇ばら軍」を鎮めた年代は、前述したように1365年頃、1700年代、あるいは1408年頃と提起されているが、決め手に欠けるのが現状である。

伝承を史実と見ることは出来ないが、全く無視することが出来ないのもまた事実である。「与那覇ばら軍」(与那覇原戦争)は、宮古史においては避けて通ることのできない重要な事項であることに変わりはない。宮古史にどのように位置づけることが出来るのか課題であろう。

年齢を基にした年代の考察には自ずと限界が生ずる。時代によって平均寿命は変化しているわけだから、元にするのはいつの時代の資料を

使うかであろう。その中であって「宮古島旧記」に散見される16歳ころに結ばれていることは捨てがたい記録であろう。

この課題を深める手掛かりは、「与那覇ばら軍」で滅ぼされたとされる村々の発掘調査の考古資料であろう。幸いにも高腰城とミヌズマ(美野島)遺跡の2件が発掘調査されている。これらの遺跡から得られた発掘資料を基に、伝承を重ね合わせてこの時期を考察することは可能である。遺跡から出土した資料は同時代の資料であるだけに信憑性は高いと思われる。

5、宮古・八重山交流圏の形成

2件の遺跡の考古資料をひもとく前に中国産の陶磁器等について大まかな背景を概観してみよう。

中国産の陶磁器は、博多ルートで入り博多の商人によって南島にもたらされた。中国産の白磁玉縁口縁碗、白磁端反碗、長崎産の滑石製石鍋、徳之島産のカムイヤキなどが宮古からも出土する。時期的には11世紀末から13世紀にかけてのことであろう。

その後、中国では新たな南方ルートが形成された。木下尚子(熊本大)を代表とする研究グループが発行した『13～14世紀琉球と福建』(2009)に「図5、13世紀後半～14世紀前半の二つの交流圏」が掲載されているので、借用した。この場合図3とした(図3)。研究グループは、研究の成果として以下の2点を報告している。(注30)
1、今帰仁タイプは福建省浦口窯で13世紀後半～14世紀前半に焼かれた磁器である。ピロースクタイプⅠ類は同じく閩清義窯・青窯で13世紀後半に作られた。同Ⅱ類は13世紀末～14世紀初頭に生産が始まり、14世紀中頃までに生産のピークを迎え、同時に外反口縁のⅢ類

への変化が始まった。Ⅲ類は明代前半にかけて大量に生産された。これらは東および東南アジア各地に輸出され、その一部が琉球列島に直接もたらされた。

2、13世紀後半から14世紀前半、福建から先島諸島・沖縄諸島にいたる交流圏が新たに形成された。この交流圏は、福建→先島諸島→沖縄諸島の方向性を持ち、中国側の基地として福州港がかかわっていた可能性が高い。

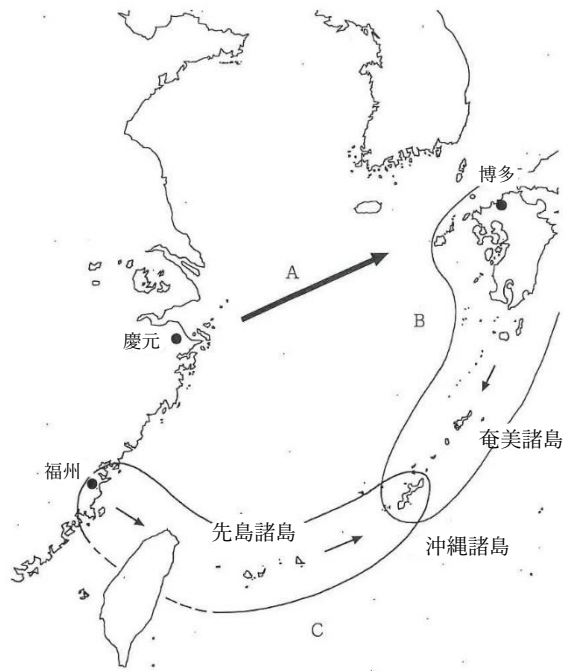


図3. 13世紀後半～14世紀前半の2つの交流圏
 A : 慶元から博多に向かう中国陶磁の動き
 B : 博多を起点にする中国陶磁の流通圏
 C : 福建を起点にする中国陶磁の流通圏
 → : 陶磁の移動方向

博多を経由せず直接福州から宮古・八重山に陶磁器がもたらされる新たなルートが形成されたことは大きな出来事である。このことで宮古にどのような変化がもたらされたのであろうか。博多を経由して陶磁器等が入っていた時期に比べれば遺跡が増加している事実がある。多くの人々の流入があったのであろう。その多くは沖縄を含めた北からの流れなのであろう。「与那覇ばら軍」の伝承を生み出す素地がつくられてい

ったのだろうか。

宮古からは特徴的な2種類の白磁碗が出土する。一つはピロースクタイプと称される。器壁は厚手で口縁が内湾する。碗の口唇は尖るもの（Ⅰ類）と丸みのもの（Ⅱ類）がある。それから外反口縁のもの（Ⅲ類）がある。福建省の閩清義窯で生産されたものである。今ひとつは今帰仁タイプと称される。器壁は薄手で口縁が直行する。口縁端は平坦のもの、丸いものがある。福建省の浦口窯で生産されたものである。

この二つの白磁碗は沖縄諸島より宮古諸島の方が比較的出土量が多い傾向にあるという。

この白磁碗を出土する宮古の遺跡として、住屋遺跡、ミヌズマ遺跡、尻川遺跡、尻並遺跡、平瀬御神崎遺跡、高腰城跡、野城遺跡、カームイ遺跡、大牧遺跡、ムイズマ遺跡、砂川元島遺跡、新里元島上方台地遺跡などが知られている（図4）。その遺跡の多くは宮古島の東側に集中している。特に高腰城から集中して出土しているのが特徴的である。

14世紀後半、中国では元王朝から明王朝に替わり新たな時代を迎える。この政治的な変化は南方ルートの衰退に直結した。琉球の明への朝貢、宮古の中山への朝貢など、時代は大きく動いていた。中国産の陶磁器の流れにも影響を及ぼした。中国→琉球→宮古という公的ルートが形成されていくことになる。

博多を経由して陶磁器などが宮古にももたらされた時期に比べれば、14世紀にかけて遺跡の数が2倍近くも増加している。

このころ島外から多くの人々が宮古に移住し人口が増えたことを意味している。「宮古島旧記」に「東の百郡、西の百郡」と表現されていることに相通するのであろう。

そのような頃、「与那覇ばら軍」は引き起こされたのであろうか。

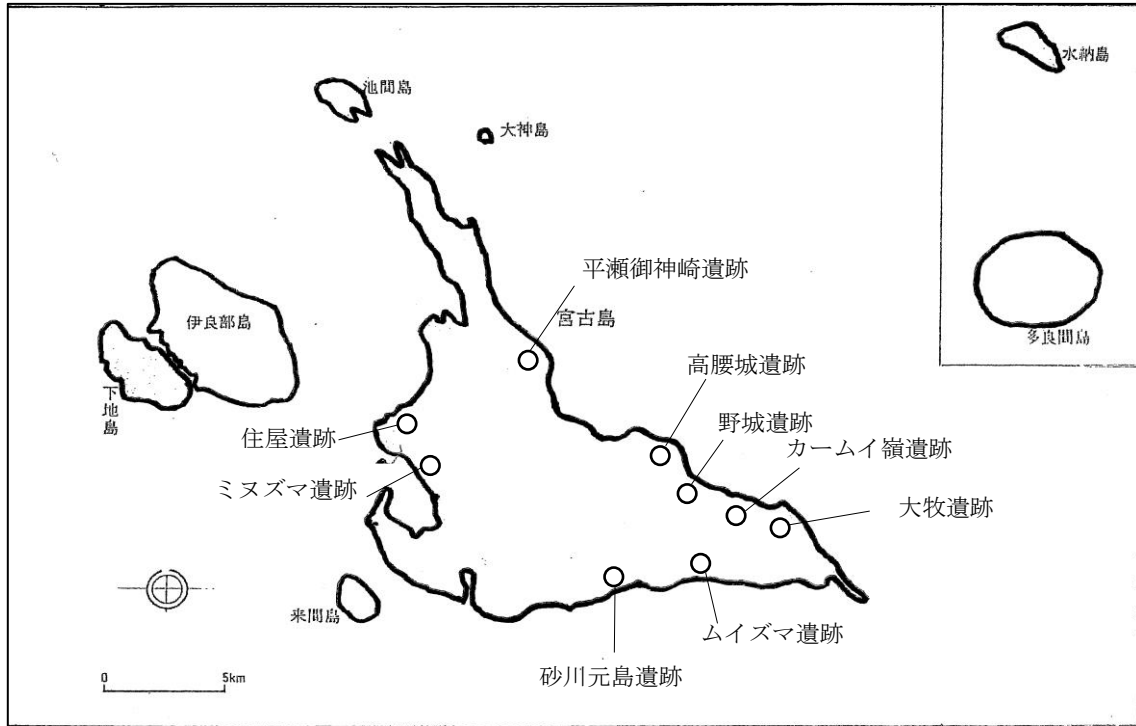


図4 ビロースクタイプ碗・今帰仁タイプ碗を出土する遺跡

6、高腰城の時代

高腰城の按司について「一、高腰の按司与那覇ばら軍に不ろばされし事」(注31)の項目で「記事仕次」に詳しく描写されている。与那覇ばらに滅亡させられた村々のうち掲載されたのはこの一件だけである。「記事仕次」は滅亡の顛末を大略以下のように述べている。

高腰城の門は南向きである。長さ 30 間 (54 m)、横 23 間 (41.4m) で西の方は甚だ険阻である。それで与那覇ばらの者共は攻めあぐねていた。高腰の按司は諸方の首長と同盟を結んで与那覇ばらの無謀な振る舞いに対峙していた。中でも城はら中喜屋泊村の内立按司は高腰按司が股肱とたのむ者であった。佐多大人は彼に賄賂を贈り、弁舌巧みに仲間引き入れた。内立按司は懇ろに高腰按司を歓待した。与那覇ばら軍はその間隙を窺い高腰城を攻めた。落城という不意の出来事に追い詰

められた高腰按司は自刃し果てた。

高腰城は城辺・比嘉集落の北方台地上 (標高 108~113m) に形成された城跡で、沖縄県が 1985~87 年度にかけて発掘調査している (注32)。多数の地元産土器の他、中国産の青磁・白磁・褐釉陶器、徳之島産のカムイヤキ、それから鉄製の鏃、石器、丸玉、管玉、古銭などが出土している。

中国産陶磁器から考えられる高腰城の時代は、12 世紀後半から 15 世紀初頭、下っても半ば頃までの時期に収められるが、その主体となる時期は 13~14 世紀代である。(注33)

特徴的な中国産の青磁や白磁には、12 世紀代の①楡搔文皿、②劃花文碗、③玉縁碗など、13 世紀代では①鏝連弁文碗、②口禿碗、③青白磁など、13~14 世紀代では①今帰仁タイプ碗、②ビロースクタイプ碗など、14~15 世紀代では①劃花文碗、②端反碗、③弦文帯碗、④青磁無文外反碗などが出土している。

南方ルートで持ち込まれた今帰仁タイプ、ピロースクタイプの白磁碗が他の遺跡よりも多いことが高腰城の特徴でもある。

戦に関連するかもしれないものとしては鉄製の鎌が1点出土している。住屋遺跡からは鎧の小札が1点出土している。しかし、「記事仕次」に記述されているような戦の痕跡は確認されていない。

これらの出土品から、与那覇ばら軍に滅ぼされたとされる高腰城は少なくとも15世紀初頭までは存在していたであろうことを知ることができる。すなわち、14世紀半ばの1365年、あるいは1700年代に起きたとされる目黒盛と与那覇ばら軍との決戦に考古資料は疑問を提示している。

7、ミヌズマ（美野島）の時代

もう一つの事例を見ることにしよう。

与那覇ばら軍に虐殺されたと伝えられるミヌズマ（美野島）という村である。この村跡は久松集落の東方に位置し、与那覇湾を望む小丘に形成されている。東美野島、西美野島に分かれていたという。この村跡の西隣に「ミヌズマ遺跡の井戸」と呼ばれる石組みの井戸がある。この井戸は、宮古島市の文化財に指定されている。

このミヌズマ遺跡は宮古島市教育委員会によって2011～2012年にかけて発掘調査され、11世紀後半から15世紀前半にかけての遺跡であることが確認されている。(注34)

4本あるいは6本組の掘立柱建物跡、埋葬人骨(4体)などが確認されている。中国産の陶磁器等では、11世紀～12世紀に属するもので①長崎産の滑石製石鍋、②徳之島産のカムイヤキ、③白磁玉縁碗、④白磁端反碗などが出土している。13世紀～14世紀に属するものでは①白磁今帰仁タイプ碗、②白磁ピロースクタイプ碗、③

白磁口禿碗、15世紀前半に属するものでは①青磁無文外反碗、②青磁弦文帯碗などが出土している。他の遺跡では13世紀代に共伴している青磁の鎬連弁文碗は出土していない。土器には①滑石製混入土器、②滑石製石鍋模倣土器も出土している。褐釉陶器は土器に次いで出土量が多いのも特徴的である。

穀類の炭化物として、イネ、コムギ、オオムギ、ムギ類、アワ、マメ科などが検出されている。特に炉跡から検出されたオオムギ、コムギの年代測定によれば13世紀後半から14世紀代の数値がでていいる。すなわち13世紀後半には穀類が栽培されており農耕が始まっていたらしいことが確認されている。

与那覇ばら軍に全滅させられたと伝えられているミヌズマではあるが、15世紀前半に属する陶磁器も出土している。この遺跡も高腰城と同じように考えることができよう。

結論的にいえば発掘された資料は、1365年、あるいは1370年代とする目黒盛と与那覇ばら軍との決戦があったとする想定には否定的といわざるを得ない。発掘調査で導き出された結果は、高腰城およびミヌズマ（美野島）の集落としての活動は、1400年代前半に終えていることである。

この活動の終焉が「与那覇ばら軍」によるものかどうか。伝承を受け入れればそうであろうが、発掘調査からは伝承を補完するにはいたっていない。「与那覇ばら軍」の是非については、今少し検討が必要であろう。

8、「与那覇原軍」の共同研究

久貝弥嗣を代表に本村麻里衣、久貝春陽が共同研究者となり、「伝説の争乱・与那覇原軍—宮古島の13世紀から15世紀にかけての防衛的遺

跡の消長に関する研究」が2018年から2019年にかけて実施されている。

農耕の開始と家畜としてのウシの出現という文化的要素の変化は、与那覇原軍と密接な関係性を有している。この人々はどこから来たのか、またこのような文化伝播を生み出した歴史的な変化は何だったのかを課題として、「ヒトとモノの移動」に視点を据えて研究は進められている。具体的には、①中国製陶磁器、②石積遺構、③与那覇原軍の関連遺跡（川満地域を中心に）、④宋銭の項目である。すぐれた分析だと思う。

ここでは「与那覇ばら軍」後の動向を中心に触れることにする。総括のほんの一部ではあるが以下のように分析している。

宮古は与那覇原軍（いうさ）を境に大きく社会構造が変化していく。その一つに白川浜の機能が衰微し、漲水港が宮古島の物流の拠点として集約化されることである。高腰タイプの遺跡が形成される契機は13世紀後半の交易グループの出現であったが、この交易グループの活動の弱体化と白川浜の機能の衰微は重なっている。もう一つは1390年の与那覇勢頭の中山朝貢で、宮古島と沖縄諸島との関係性の高まりである。14世紀後半以降の中国製陶磁器の搬入航路としては、福州—沖縄諸島（那覇港）—宮古諸島（漲水港）の見方で考えることが歴史史料、中国製陶磁器の出土状況の点からも妥当と考えられる。（注35）

この研究報告の総括では、与那覇原軍が終結した後、1390年の中山朝貢があったと考えているようである。確かに中山朝貢は宮古にとっては大きな出来事である。歴史の流れで言えば一つの大きな節目でもある。高腰城やミヌズマは襲撃されたが、15世紀前半までは集落活動は継続していたと考えられなくもない。ただ、与那覇勢頭は白川浜から船出して中山に朝貢したことになるので、その頃はまだ白川浜は機

能していたことが考えられる。

港としての機能が白川浜から漲水浜に移動することになったのは、目黒盛が与那覇ばら軍に勝利した後のことであろう。これらのことを考慮すれば、1390年の中山朝貢より後に「与那覇ばら軍」は終結したと考える方がすっきりする。どうであろうか。

港の機能が漲水浜に移動したのは、目黒盛の根間城の近在にあり、立地的な要素もあろうが、中国産陶磁器をめぐる大きな時代の流れが背景にあると思われる。

9、終わりに

「史伝」および「庶民史」の与那覇原軍についての考察を検証して、考古史料を参考にしながら「与那覇ばら軍」を考えてみた。もとより結論づけられるものではない。先達の考察に考え方を示したにすぎない。ただ検証を通して気が付いたことは、考察する根拠がはっきりしていないことである。資料が少ないだけに世代計算に頼ることも致し方ないのかと思う。世代計算に着眼したことはよかったと思うが、問題なのは資料元であろう。

また、「記事仕次」につづられた伝承の記録をどのように理解するかであろう。14世紀の戦といってもイメージしにくい。与那覇ばら軍は村々を全滅させたというが、発掘調査では戦の痕跡は見いだされていない。鉄製の鏃（高腰城）と鎧の小札（住屋遺跡）が1点出土しているにすぎない。弓矢は木製なので残らない。果たして「記事仕次」がつづっている戦というのはあったのだろうか。課題であろう。

「史伝」は目黒盛が与那覇原戦争で勝利した年代を1365年、年齢を25歳としている。これが定説のように扱われていることは、宮古史にとっては問題であろう。目黒盛の生年は、皇紀

2000年という区切りのいい年にあてたと思われる。25歳という青年の数字をあてはめ1365年としたのではないだろうか。資料が不明なだけに、もとより憶測にすぎない。

また「庶民史」が提起する1700年代も推定している目黒盛の年代にいくつかの疑問が残される。

「郷土史考」の1世代を16年とする想定は否定できない一面がある。計算通りにはいかない面もあるだろうが、耳をかたむけることも必要であろう。

14世紀の半ばは中国に政治的な変動が起きた。元から明への交代である。このことが木下尚子ら研究グループが提起した南方ルートの衰微に拍車をかけた。中山の明への朝貢、宮古の中山への朝貢、中国産の陶磁器の流れにも変化が現れた。

島尻勝太郎が提起した、旧記に物語られている豪族の争いを「すべて史実と見ることは出来ないであろうが、多くの小部落が、次第に勢力のある者に統合支配され、政治社会が成立していく過程」は、図1の「諸按司の相関図」に見ることが出来る。また、「和人又は沖縄本島からの有力者の来島について」は、遺跡の増加にそれを見ることができよう。

おもしろ語に「あぢ」とある。政治的支配者となった「按司」のことと考えられている。宮古の歴史に〇〇按司という「有力者」が見られる。彼らは沖縄などから渡来した者であろうとも考えられる。

「宮古島旧記」に記述されている争いは、このような「有力者」によるものであろうか。東アジアの動乱や中国産陶磁器の出土を考慮すれば、宮古の争いの時期は14世紀後半を視野に収めることができよう。その争いの結末が「与那覇ばら軍」と見ることもできよう。

「記事仕次」に描かれた伝承の目黒盛と与那

覇ばら軍との決戦は、1390年の中山朝貢後に起きた可能性は否定できない。この「物語」は伝承を広げた創作のようにも思えるのだが、どうであろうか。

[注]

- (1) 「平良市史編集だより」第10号(1982)、平良市史編纂事務局。3頁。
- (2) 『平良市史』第三巻資料編1(1981)、平良市役所。76頁。
- (3) 注(2)に同じ。64頁。
- (4) 慶世村恒任『宮古史伝』(初版1927)、復刻版(1976)、城野印刷。63頁。
- (5) 稲村賢敷『宮古島庶民史』(初版1957)、新版(1972)三一書房。192頁。
- (6) 注(5)に同じ。192頁。
- (7) 注(5)に同じ。192頁。
- (8) 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』(1987)、吉川弘文館、262頁。
- (9) 注(2)に同じ。76頁。
- (10) 注(4)に同じ。49頁。
- (11) 注(5)に同じ。171～172頁。
- (12) 『南島歌謡大成Ⅲ宮古編』(1978)、角川書店。127～128頁。(狩俣資料)
- (13) 稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』(1977)、至言社。305頁、310頁。
- (14) 注(5)に同じ。159頁。
- (15) 注(4)に同じ。66頁。
- (16) 注(4)に同じ。90頁。
- (17) 注(4)に同じ。63頁。
- (18) 注(5)に同じ。182頁。
- (19) 注(5)に同じ。191～192頁。
- (20) 注(4)に同じ。75頁。
- (21) 注(5)に同じ。155頁。
白川氏6世恵道(1540生)—16世恵福(1768生) = 22.8才
忠導氏3世玄保(1492生)—13世玄陳(1780

- 生) =28.8 才
1 世代平均は 25.8 年で 26 歳とする。
- (22) 注 (5) に同じ。189 頁。
- (23) 注 (5) に同じ。187 頁。
- (24) 砂川明芳『宮古島郷土史考』第 3 部 (1984)、59～60 頁。
- (25) 注 (2) に同じ。「御嶽由来記」30 頁。「雍正旧記」43 頁、44 頁。「宮古島記事仕次」75 頁、84 頁。
- (26) 注 (2) に同じ。76～77 頁。
- (27) 注 (5) に同じ。188 頁。
- (28) 注 (4) に同じ。78 頁。
- (29) 注 (5) に同じ。183 頁。
- (30) 研究代表者 木下尚子『13～14 世紀の琉球と福建』(2009)、熊本大学文学部 木下研究室。255～256 頁
- (31) 注 (2) に同じ。84～85 頁。
- (32) 城辺町文化財調査報告書第 5 集『沖縄県・城辺町 高腰城跡一範囲確認調査報告書一』(1989)、沖縄県・城辺町教育委員会。
- (33) 注 (31) に同じ。71～72 頁。
- (34) 「平成 25 年度ミヌズマ遺跡発掘調査現場説明会」資料 (2012)、宮古島市教育委員会。『発掘調査にみる宮古の歴史』(2015)、宮古島市教育委員会。43～49 頁。千田寛之「宮古島のグスク時代農耕試論」(『最新の研究成果にみる宮古の歴史』2017)、宮古島市教育委員会。18～25 頁。
- (35) 代表者・久貝弥嗣『伝説の争乱・与那覇原軍一宮古島の 13 世紀から 15 世紀にかけての防御的遺跡の消長に関する研究一』(2018)、121 頁。

